慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	平泉松島仙臺地方見學記
Sub Title	
Author	宇宿, 捷(Usuku, Sho)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.1 (1929. 3) ,p.163- 165
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19290300-0163

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

平泉松島仙臺地方見學記

十一月二日(金曜日)午後六時二十分上野驛發、平泉松島仙臺方面の史學旅行の途につく、一行五名。

十一月三日(土曜日明治節)午前七時、平泉着、自動車にて中尊寺に向ふ。途中高館判官館に登る。落葉を踏みつゝ行くこと一丁餘にして頂上に達す、一堂あり、義經堂と稱す、義經の胴體を埋めたる所なりと傳ふ。堂は天和三年伊達綱村の建立にかゝる。正面に「白幡大明神」の額あり。此處より望めば、東方北上の流域を隔てゝ、歌に名高き束稻山は眼前にあり、また藤原氏の館址、柳御所跡、伽羅御所跡及び秀衡建立の新御堂跡など附近に存す。

高館を下り、程無く、「關山中尊寺」の石碑の立てる所より、月見坂を登り、中尊寺に詣づ。

先づ峯藥師堂に參詣し、鐘樓に至る。鐘は印度式の梵鐘なれども龍頭なく康永二季太歲癸未七月の銘あり。

次に寶物館にて、山内諸院出陳の寶物を觀る。就中、一字金輪佛木造坐像は、陸奥國押領使、藤原清衡が、天治元年建立せし、中尊寺金色堂の南なる、山王社の配佛にして、肉色の大日金輪なるが故に、世俗之を人肌の大日と稱す。その玉嵌は現存玉嵌中最古のものと稱せらる。またその體内を穴洞にして、背部を畫きて平肉彫となせるが如きは、よく藤原式の特徴を具へたるものと云ふべきなり。この外、御經藏領骨寺古繪圖(天治三年三月廿四日鎮守府將軍藤原朝臣清衡と)あり。胎金兩界曼荼羅(傳智證大師筆)二幅、南北朝より、足利時代に亙る古文書、十七通等、多數あり。

辨財天堂　寶永二年八月二十日、伊達綱村、此堂を建立して本尊を納む。左右の壇上には藤原清衡が、長治二年最勝院を建立して納めし、最勝王經十界寶塔曼荼羅十幀を安置す、紺紙に金泥の細字を以て十層の塔形を圖し、その左右及び下部には經の大意を彩畫せるものなり。

金色堂　里俗之を稱して光堂といふ。天仁二年藤原清衡の建立にかゝる。内に三壇を構へ、彌陀・勢至・觀音・六地藏・多聞天・持國天を安置す。各法橋定朝の作と傳ふ。中壇に清衡、左壇に基衡、右壇に秀衡三代の棺を納むる靈廟なり。秀衡の棺側に泉三郎忠衡の首桶ありといふ。四本の柱は七寶莊嚴の卷柱、十二光佛を圖現し、柱梁には螺鈿球玉を鏤め、四壁内外紗羅布を以て之を包み、黑漆を厚塗にして金箔を貼し、全堂燦く金色を以て輝きしも、今はその片影により當時の莊麗なりし樣を偲ぶのみ。

經藏　天仁元年藤原清衡の建立にかゝる。元來二階造なりしも建武四年上層燒失し下層のみ殘る。内に八架を設け三種の一切經及び經筥二百六十六を納む。清衡奉納のものは紺紙金銀泥の一切經(卷子)にして一行交りのもの、基衡奉納のものは紺紙金泥の一切經(卷子)、秀衡奉納のものは宋版の一切經(折本)なり。此他螺鈿卓一脚、螺鈿八角須彌壇一基等を存す。古文書には名高き、北畠顯家の筆寫せる清衡の願文一卷あり、豐臣秀次禁制一通等あり。

經堂を出で繪畫館を經て、白山神社の邊より、衣川の古戰場を望み、引き返して、最後に辨慶堂に詣づ。

辨慶堂　一に愛宕堂と稱し、上杉輝虎・最上義光・蘆名義廣・伊達政宗・松平西晴信等の文書十餘通を存す。

中館寺より徒歩にて醫王山毛越寺に至る。

毛越寺　此寺は嘉祥三年慈覺大師の開基にして、其後、長治二年圓河・鳥羽兩天皇の勅願によりて、藤原清衡以下二代の間に再建あり頗る盛大なりしが、藤原氏滅亡後、嘉祥二年野火に罹りて大半烏有に歸し、爾來舊觀に復さずして今日に至れり。

當寺本支院の寶物は多く寶物館に陳列せられ、清衡奉納紺紙金銀泥の寶綱經一卷、藤原秀衡書寫紺紙金泥の法華經一卷、九井氏勝茂筆の平泉古繪圖（高館・毛越寺古圖）一枚、熊野三社（新熊野）木像三軀、元亀壬申年三月朔日付伊達輝宗判物等あり。

平泉の見學を終り、再び自動車にて、達谷窟及び巖美溪を經て一ノ關驛に急ぐ、左右には東北特有のにほひが幾千となく夕陽を浴びつつ叩頭する樣は、吾々一行と別れを惜むかの如く思はれり。五時二十七分一ノ關發、六時三十五分仙臺驛着、驛前の陸奥別館に旅裝を解く。

十一月四日（日曜日）快晴。午前八時六分仙臺發宮城電鐵にて松島に向ふ。同九時松島公園下車、三葉の松を右に眺め、鬱然たる老杉枝を交ゆる下を通り、瑞巖寺に達す。

此寺は、人皇五十三代淳和天皇、天長五戊申年、慈覺大師圓仁の開基にして、比叡山々王權現の分靈を奉じ松島に下り、支那の四明山並に比叡山の法堂伽藍を模倣して、一寺を營み、青龍山延福寺と稱す、後圓福寺と改めたり。一行は先づ松樓千鳥の間、鷹の間を過ぎ、孔雀の間に至る。

中央には、當山の開基伊達政宗の木像を安置す、その子忠宗の時の作なり。左右の壁には瑞巖寺前住歷名を立掛く　右側のには寛文十三癸丑春、現住鵬雲東博拜書とあり、左側のには、寛政四年壬子三日、文溟嗣子源文叔建之とあり。

文王の間　入口には、慶長十有五歲上章閹茂孟陬月立春と記せる、虎哉宗乙の松島瑞巖寺の額一面を掲ぐ。內部には探幽法印行年六十九歲の筆とある、中央維摩居士、左右山水の三幅對あり、襖は黃檗の隱元なり。

御座の間の正面には仙臺藩五代の主、獅山公吉村の「圓滿」の額を掲ぐ。

玄關の欄間には左甚五郎の作を傳ふる。葡萄に木鳳、竹に虎、松に仙人を配せる見事なる彫刻あり、この玄關の造作は、唐の經山寺の型を取りしものなりと云ふ。

當寺の寶物中特に注意を惹けるは、左の數點なり。

雲版　銘に、「圓福庫裡雲版　嘉曆丙寅秋、住持明極謂」とあり。

二位尼公佛舍利寄進狀一通、これは尼將軍政子より、見佛上人へ、佛舍利寄進の狀にして珍品たり。

佛舍利塔　一箇、水晶塔にして高さ二寸三分、政子より見佛へ寄進せるものにして、佛舍利三粒を納む。

慈光不昧禪師雲居大和尙遺偈、一通。

天臺記（寫本一卷）文明二庚刀歲孟春中五日　奥州松島入風左次郎

藩重書寫の奥書あり。

この天臺記及び前記政子の寄進狀、雲居の遺偈は、今回始めて中央の史界に紹介せらるゝものにして　今次の旅行の一收穫たるを失はず。

次て新富山より、松島灣の風光を大觀し、下りて、五大堂及び觀瀾亭に至る。

五大堂には、五大明王の像を安置し、內堂は桓武天皇の延曆二十年、坂上田村麻の建立と傳へ、外堂は、慶長五年仙臺藩祖伊達政宗の建立せるものといふ。

觀瀾亭は、豐太閤の桃山の茶亭を移せるものにして、松島の諸島を一望の中に聚め、芭蕉翁ならずとも、「嗚呼松島や松島や」と感歎しうる佳處なり。

斯て雄島に歸化僧寧一山の作れる、賴賢の碑等を見て、午後一時半松島を發し、本鹽釜驛に下車、圖幣中社鹽釜神社に參拜す。

境內には、「文治神燈」並に「日時計」あり、前者は文治三年、藤原秀衡の三男、和泉三郎忠衡の寄進せるものにして、開扉と蓋とは後世の修補にかゝる。後者は寛政四年、禰宜藤塚式部の獻納せるものにして、林子平の考案にかゝれるものなり。

同二時五十分本鹽釜驛發、多賀城驛下車、田間丘陵を右曲左折し行くこと二十五町にして多賀城寺跡に至る。講堂　食堂、東塔等の礎石を留るのみ。それより野田玉川を經て、多賀城址に到り有名なる多賀城碑を見る。

この碑は昔、多賀城門に立てゝ四境の遠近を示したるものなり。當時蠻夷の來り侵すや京師に報じ、四隣に告げ、或は兵を寡り軍を出す急遽匆卒の際、此碑に依り遠近を量り、日子を定め緩急臨機の計を施したるものといふ。次て暮色迫る頃、急ぎ多賀城の牙城の跡等を踏査して岩切驛に急ぎ、五時五十五分同驛を發し、六時十分仙臺に歸り、解散す。

斯くして、三日に亙る見學旅行は、大なる收穫を得て、無事に有益に終りを告げぬ。

最後に、この行諸所に於て、見學の便宜を與へられし諸氏に對し、茲に謹んで深謝する次第なり。

（宇宿　捷）

寄贈交換圖書雜誌目錄

阿波に隱れた建武の忠臣岩松經家	島田麻壽吉氏
ロツクの哲學と教育思潮	同　文社
下野鄉土史	下野史談會
矢板町誌	同　會
稻米秀山遺稿	池田史談會
吉田新田古圖文書　橫濱鄉土史料	吉田勘兵衞氏
蒙古の大宰相哲人耶律楚材　安岡正篤著（人物研究叢刊第六）	金雞學院
支那政教夜話上　赤池濃著（金雞文藪第八）	同　院
日奬交通史料一	武藤長藏氏
備後史談四の一二。五の一、二。	備後鄉土史會
朝鮮佛教五六、五七、五八。	朝鮮佛教社